

幼 兒 教 育

第二十卷
第十二號

大正九年十二月十五日發行

幼兒と宗教心

文學博士 姊 崎 正 治 談

通常、子供は罪のないものであると考へてゐるが、これは一種の理想化した考で、見方によつては、子供は頗る主我的のもので、自分の生命慾の本能のみで生きてゐると考へてもよいと思ふ。ことに、三歳四歳頃はこれが著しいが、やがて、四歳五歳位になると模倣全盛の時期になる。大人の言動を何でも真似る、しかし、それも自ら真似ようと思つてする——所謂、有爲模倣——の場合よりも自然にしらず、無爲模倣の場合が多い。

宗教の方面からこの時期を考へて見ると、三歳位の幼児期には、全く宗教はわからない。しかし、四五歳頃になれば、模倣によつて宗教心があらはれて来る。この時期は自ら反省するといふことは勿論ないのであるが、外部からの印象によつてどちらにで

も動いて行く時期である。實に、有爲無爲の教育はこの時期に始まるのである。言語の如きは、すてゝをいへば何時の間にか覺えるもので、二ヶ國や三ヶ國の言葉はこの時期ならばたやすく覺え得る。この状態を模倣性の、或は、被暗示性のつよい時期といふのである。それ故に、宗教心の養成はこの時代から初まるべきもので、これ以前には、あり得ないのである。この時期において印象をのこすのは、主として、成人の宗教的動作に對する模倣であつて、信仰の教理は勿論わからないのである。よし、言葉の上では真似ることはあつても、それは何等意味をなさぬのであつて、後に、感化としてのこるものは、動作そのものである。この點は頗る重要な點で、か

の原始人の宗教についても、宗教心の發動は、先づ

儀式が先で、信仰がこれにともなふのである。

そこで、たゞ動作を模倣するといへば、外面的のやうに思はれるが、事實さうでない。我々の精神作用は、幼稚の時代ほど、動作の方面から精神におよぼすことが多いのである。動作をするといふことが、觀念よりも先になつて、即ち宗教上の動作をまねてゐると、やがて、ありがたいといふ感じをおこし、それが後に一定の觀念に結晶して來るのである。但しこの場合にも、教理は勿論與へられる。例へば、キリスト教の家庭では、神とかキリストとかいふことは宗教上の動作とゞもに教へこまれ、子供はこれをうけいれる、そして質問もする、けれどもその答の如何に對しては、頗る呑氣なもので、たゞ答へて貰へばそれで満足してゐる。したがつて教理に對しての質問といつても、それは發達した大人が眞理をもとめんとするの熱心から發するやうなものではない。そこでこの時期に教理を與へるといふことが既に問題である。ごく幼稚な頭に信せられるやうにするにはまた、幼稚な具體的なものにならなければならない。これについて面白い例がある。「神は天にゐます」。とか「高きところにあます」。とか教へられた子

供がある時、電信柱にのつてゐる工夫を指して「母さん、あれは神様？」ときいたり「神はゐまざる所なし」ときいて壁に脊をうちつけて「神様は何處にでもゐらつしやるから僕のうしろにもゐる。神様をつぶしてしまへ」とりきんだり、雨がふるのを恨めしさうにながめて「困つたなあ、神様が天で水道のねぢをあげつばなしにして、しめるのを忘れてしまつて」。とつぶやいたり、子供の信する神はことごとく具體的のものである。しかも、これは成人の後には當然やぶれてしまふものである。そしてこの、幼時からもつてをつたものゝ破壊される時が危険なのである。

しかし幼時の場合に動作の方面から自然と宗教的アトマティック外圍の中にをく様にすればこの憂は少ないわけである。即ち一つ一つの動作を見習ふとゞもに、それからうける感化は、その動作によつておこされる感情そのものである。情緒そのものである。

他人の動作を見て、これにともなふ心持を直覺するその鋭きは、我々大人の到底及ぶところではない。子供は實に感じそのものを、心持そのまゝを、そつくり受け取ることが出来るのである。大人に接した時に子供はすぐ、子供好きの人と否とを區別する。

常に子供嫌ひの人が、何かの必要上、急に、機嫌をさるやうにしても、子供の方では、よく知つてゐるから、かゝる大人にはよりつきもせぬのである。子供は大人の態度、その動作によつて直感する。

宗教上、禮拜の時に子供が列席する、教理も説教も一向にわからない、何故ならば、これらは知力的方面のものであるから。しかし禮拜の心持といふものは自然に子供の心に得られるのである、そして、これがまた根本條件として必要なものである。「神様が助ける」とか「佛様が助ける」とか教へたところで、彼等には、助ける、といふことが既にその意味がわからないのである。大人の動作を模倣し、その心持に同感してゆくそのうちに、具體的の經驗をまねると同時に、その有する觀念をうけるようになるのである。この同感といふことが大切なことで、我々の生命に對する同感の發達が宗教となるのであるが、この同感が直接に與へられるのは家庭である。信心深い親兄弟の動作を見真似ねてゐるうちに、子供も自然に信心の心持ちになる。これが一番無理のない方法である。近頃は日曜學校なども發達して、宗教教育の問題もいろいろ言はれて居るが、知力的方面か

ら與へようとすることはあまり效がない様である。日曜學校へ行く子供について、或は幼時にその記憶をもつてゐる人々についてきいてみても、例へば基督教にしても、神とか救主とかいふことは、いくら、具體的にくだいて教へこまれても、あまり興味をもたず、それよりも、大勢と一緒に歌をうたふといふことを深く印象されるのである。しかし、とかく禮拜といへば、大人本位で、子供はこれにつれられて行くといふ感があり、また子供のために出來た日曜學校組織が、折角、宗教的氣分の根本を與ふる禮拜をやめて、たゞお話により教訓的に教理を教へこまうとする。そのためにかへつて効果をあげてゐないのではあるまいかと思はれる。子供のための禮拜をして、子供相當にその氣分を味はせるようにしたならばどんなによいかと思ふ。

小學校あたりで、一年二年位の生徒をつれて神社に詣でる時でも、引率する先生が、たゞ何となしに難有くなつて自然と禮拜をする。これを見れば、結構でやはり自ら頭を下げるといふやうならば、結構であるが、禮拜氣分を味ふまへに、いろいろ禮拜すべき理由などを説明して、「それ故に皆様は敬禮しなけ

ればなりませぬ」といふやうに來るから、禮拜の氣分に自然なところが缺けて、その態度が、どうもかたくなり過ぎる。「氣を附け」の姿勢をとつてそれから上體を何度まげて敬禮するといふやうでは、とても、ゆゑりのある禮拜氣分にはなることは出來ない。身體の緊張状態をつゞけると、たゞかたくばかりなつて、精神的の自由發動がまたげられるから、足元の方がかへつてフラついて、肩が凝つてしまひ、折角、神様のまへで敬禮はしても、心持はゴツ／＼した窮屈なもので禮拜そのものから受ける動作の方面の感化はよくないものになりやすい。一番大事なことは、ゆゑりのある心持で禮拜をする態度をとることである。さうした氣分の漲つた集りの中に子供をたゞ入れてをけば、何も理屈をさかなくても、否、理屈をいはない方がかへつて禮拜そのものを直覺させることになるのである。たゞ、子供は實に活動性に富んだものであるから、同じ姿勢をいつまでもとつて居られるものではない。たへず動く、この點もよく子供の心に同情して、その禮拜の間にも子供は寛大にとりあつかつて自然のまゝに適當な變化をゆるしてやるやうにすればよい。ことに、このために

は先づ各々の家庭が直接の力となるのに一番都合がよいのである。教會などといふ團體の中にあつてただ抽象的の話をきかせられおとなしくせよと叱られわけもわからずに窮屈な感じをあたへられるよりも家庭の眞情のこもつた人達が、信心深い動作で、禮拜する中に子供を坐せしむることがどれ位印象ふかく、また弊害が少いことであらう。

靈の交通を自ら信することも出來ないで、口に祖先崇拜をさくことが偽善であるやうに、熱烈な信仰のないものが、たゞ子供に宗教心をやしなはせようごあせつても甲斐はない、

たゞ以上のことにつけ加へて必要なことは人の動作が大きな感化をあたへると同時に、その周圍の美的の状態による感化といふものも考へねばならぬ。これは發達の度のひくい時代ほど、これからうくる影響が大きいからである。我々にしても、佛像を電燈の光で見た時と、蠟燭のゆらめく焰でうかつた時とは、同じ佛に對しても、うくる感じが違ふ。この微妙な感じをことに鋭くうけ得る時代には、この邊のことについても、また氣をくばる方がよい。我が國で神棚を稱して、家々にまつつてゐるものが、

どうも、埃^{ほこり}だらけで、まことに貧弱である。あれでは、お祖父^{ぢい}さまやお祖母^{ばあ}様が、朝夕^{あし}拍手^{かっしやう}うつて拜するのを見まねる子供にしても、崇高といふ感じはおこりにくからうと思ふ。

子供に宗教心を養ひたいと思ふならば、先づ我々自らが信仰の中に生き、しかも、彼等により大きな感化を興へ得るような環境をつくるといふことが何よりも大切なことであると思ふ。(文責記者)

これは姉崎博士の帝大に於ける宗教學概論の御講義の中のある時間のお話でした。とかくいろ／＼に考へられ易い問題とて、皆様にも御紹介したく先生の御校閲を經る暇もありませんでしたので、たゞおことはりだけ申上てこゝにのせました。伺つてゐるうちに、それからそれ自分の頭にうかんで來たことがありまして幾分これをませて書いてしまつた點もありません。

ことに、子供が信ずるものが如何に具體的であるかといふことについては、私共、子供を大勢とりありかつてゐるものゝ常に感じ、また時に噴飯させられることが屢々あることゝ思ひます。私共は具體化さ

れた神を偶像といつて退けます。しかし子供にとつては無形^{むけい}といふものは考へられません。姉崎先生が動作から印象を興へるようにとくりかへし／＼仰せになつたことに私も深く共鳴しました。よく私共の聞くことですが、大人になつてからは信仰になかなか入りにくい、それにひきかへて、子供の時分にしみこんだことは、力づよいものがあるといふのも、大人になつてからはそれが理屈から來るためせう。理屈なしに、たゞ何となく難有く、うれしく、尊く思ひこんではいつたものは、いつまでも自分から離れません。この意味で小さい頃から信心ぶかい家庭にそだつて、いつとはなしに信仰に入つた人は、動かないあるものを握つてゐると思ひます。勿論さうした人に偏狭な考の人が往々あつて他宗教の人を人間でないやうに見る人がないでもありませんが、いろ／＼の思想の動搖にあつても尙自分の中にうごかせないものをもつて居るといふのはやはり幼時にうゑつけられたものが多いのです。理屈は人によつて變り、思想は日に日にうつつて行きます。理屈から信仰に入り得るとすればそれがまた動搖するのも無理のないことせう。「何となく、なしに」といふものを自分のう

ちにもつてゐるその方つよきは、感じ、そのものからうけとつた方に相違ありません。よく所謂宗教家が、理屈づめに、幼ない者等に神を説いてきかせてゐるのを見聞する時に、思はず眉をひそめます。なせ、その教へる人自ら敬虔にぞんだ心で、しんみりと禮拜する心持にあるひは讃仰する態度に出て、子供をその中にひきこまないのかと思はざるを得ません。

「神の存在」といふ深遠な哲理を具體化しようとするのが間違ひなのではありませんまいか。子供が何かいたづらをするとき「神様は其處に見てゐらつしやる」といつて母親はこれをいませしめる。神様も巡査がはりになつてしまつては大變です。叱るなら母親なり兄弟なりが自分のつよさで叱つたがよいと思ひます。神様をそこまで引おろして叱らなくても。かうしてしらすしらす子供の心に宗教心のまちがつたものを與へるのは恐いことであると思ひます。

氣分をつくるといふことから云へば子供が日曜學校に行き、一緒に歌をうたつたり、美しい音楽をきいたり、綺麗なカードを貰つたりして喜ぶのは子供にとつて幸福なことです。その何とほなしの嬉しさの中に、祈りをきき、聖句を片言まぢりにおぼえて、

目に見えざる世界、神の存在にいつしか心持がひろげられて行く様になればよいのです。

前述の御話の中に美的の状態といふことがありましたが、私自身これをつよく感じた経験があります。それは以前に幼稚園に居りました頃ある小春日和の土曜に、二十四五人の幼児をつれて散歩に出ました。ふと、通りがかりに駿河臺のニコライ堂の中を見物しようと思ひました。腕白ざかりの子供二十餘人、ごた／＼と参りましたが、會堂の留守居も快く入れて呉れました。私は、別に静かになさいとも、列をい、てとも申しませんでしたのに子供等はそつとあるき初めました。何時も廊下をガタ／＼とはしる子供もどうしたかとおもふ位、むしろ可笑しい迄にしのび足の姿です。初め入口のところに立つた時、あの伽藍の中で、——いろ／＼の尊像や、額や高價な裝飾具など置いてあるあの大伽藍の中で——、ワツと走りまはられたらば——といふ懸念が頭にひらめきました。しかし、その時私の心持は、大變おちついてしまつて、「静かに」といふ一こともいひ忘れませんでした。ところが、彼等はどうしたのでせう、いつの間にかかはいらしい二人づゝの列をつくつてゐます。

ゴトンとも音をさせずにあるいて來ます。そして金ピカの繪や、像を、うれしさうに眺めながら、時々、「先生、あれなあに」ときくのも、私の耳元に小聲にさうやきます。私はどうしたとかさびつくりしました。全くこれは、あの崇高な建物が、彼等に美的な宗教的な感化を與へたのです。一瞬も口をやすめず喋舌る子供等が、三十分近くの間、伽藍の中で、たいうれしさうに、珍らしさうに、そしてまた、電氣にでもうたれたやうに、靜かに居りました。ことに正面の禮拜堂のところで、可愛い、頭をさげてゐるのには驚きました。私はこの時しみじみ、子供は感ずる。その感じを尊重したいと心にくりかへしたのでした。このこと以來、私は、幼稚園の保育室で子供のさわぐのを制する勇氣がなくなりました。設備といふことがどんなに子供の氣分の上に影響するかと思ひました。經費のゆるさないためとは云ひながら、天井の低い、壁のうすい、そして裝飾の貧弱な室内にゴタ／＼と大勢の子供が窮屈にはいつて、それで靜肅にどのぞむのは自制力の少ない彼等には無理な注文かと思ふようになりました。口ではさすとも、説明しなくても、彼等は正直に環境の影響をそのまゝにうけるものです。

この時に私はまた思ひました。それは室の裝飾といふ事です。どうかすると子供らしくといふ考がおこりますが、美的な感をあたへるためには、やはり

繪ならば大家の筆をかけたいものです。何故なら彼等は理解するのでなしに、感ずるのですから。(もつともこれは子供に限らず私共でも、繪にしても音楽にしても理解しようとするよりもその美感にうたればよいのですが) あんまり安つばいものをならべたてるよりも、どつしりしたものをたつた一つでもよいから用ひた方がよいと思ひます。雄大の自然の中に生ひたつた人の心の大きいのにくらべて、都會生活をする子供の神經質なのは、やはり雜然とした中にいつもおひかけおひまはされてゐるためではありませぬまいか。

私共としては、子供達が成人して、動搖のはげしい社會に、渾沌とした思想の渦中に入る時に、せめて一人一人が、何か一つうごかない信念を、力を握つてゐるようでありたいと希ひます。しかも、それは、幼ない頃に理屈なしに與へられた禮拜の動作、氣分による感化であるとするならば、宗教心の養成といふことにもつと／＼慎重に考へたいと思ひます。今は、物理學の泰斗でもう頭に霜をおく位のお年でありながらしかも、いまだに毎月の二十五日、天神様へお参りするのを一度もかゝしたことがないといふ方のことを嘗つてきく、しかもその人自身「自分でも何故かわからないがこれだけは休まれない」と仰せになるのを伺つて、私は感じてゐます。

(黒瀬艶子)